

天草流人帖

《参考資料》

高瀬舟

森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ回されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、おも立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、いわゆる大目に見るのであつた、黙許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、もちろん重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放つたというような、獐悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。有りふれた例をあげてみれば、当時相對死と言つた情死をはかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男というような類である。

そういう罪人を載せて、入相の鐘の鳴るころにこぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでも返らぬ繰くり言である。護送の役をする同心は、そばでそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることができた。所詮町奉行

の白州で、表向きの口供を聞いたたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にもうかがうことのできぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、この時ただうるさいと思つて、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、またしみじみと人の哀れを身に引き受けて、役がらゆえ気色には見せぬながら、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もろい同心が宰領してゆくことになる、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で不快な職務としてきらわれていた。

いつのころであつたか。たぶん江戸で白河楽翁侯が政柄を執つていた寛政のころでもあつただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と言つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人ひとりで乗つた。

護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この

瘦肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚こびる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面をおおった薄い雲が、月の輪郭をかすませ、ようよう近寄って来る夏の温さが、兩岸の土からも、川床の土からも、もやになって立ちのぼるかと思われる夜であった。下京の町を離れて、加茂川を横ぎったところからは、あたりがひっそりとして、ただ舳はなにさかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで目にはかすかながやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしように思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだか知れない。しかし載せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしてきた。それにこの男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗ったような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんなゆきがかりになって殺したにせよ、人の情としていい心持ちはせぬはずである。この色の青いやせ男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそうは思われない。ひよっと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしても何一つつまの合わぬことばや挙動がない。この男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえ切れなくなって呼びかけた。「喜助。お前何を思っているのか。」

「はい」と言っただけを振り返った喜助は、何事をお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺った。

庄兵衛は自分が突然問いを發した動機を明かして、役目を離れた応対を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言った。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。実はな、おれはさつきからお前の島へゆ

く心持ちが聞いてみたかったのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送った。それはずいぶんいろいろな身の上の人だったが、どれもこれも島へゆくのを悲しがって、見送りに来て、いっしょに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまっていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしてはいないようだ。いったいお前は どう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑った。「御親切におっしゃってください、ありがとうございます。なるほど島へゆくということ、ほかの人には悲しい事でございましょう。その心持ちはわたくしにも思いやってみることができません。しかしそれは世間でらくをしていた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参ったような苦しみは、どこへ参ってもなかるうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へやってくださいます。島はよしやつらい所でも、鬼のすむ所ではございません。わたくしはこれまで、どこいつて自分のいていい所というものがございませんでした。こんどお上で島にいろとおっしゃってくださいます。そのいろとおっしゃる所に落ち着いていえることができますのが、まず何よりもありがたい事でございます。それにわたくしはこんなにかよわいからだではございますが、ついで病気をいたしたことはございませんから、島へ行ってから、どんなつらい仕事をしたって、からだを痛めるようなことは

あるまいと存じます。それからこんど島へおやりくださるにつきまして、二百文もんの鳥目をいただきました。それをここに持っております。」こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目ちようもく二百銅をつかわすというのは、当時の掟であった。

喜助はことばをついだ。「お恥ずかしい事を申し上げなくてはなりません。わたくしは今日まで二百文というお足を、こうしてふところに入れて持っていたことはございませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そしてもらった銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のいい時で、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずには食べさせていただきます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようでも、お上に対して済むる時に、この二百文をいただきましたのでございます。こうして相変わらずお上の物を食べていて見ますれば、この二百文はわたくしが使わずに持つていえることができます。お足を自分の物にして持つていえるということは、わたくしにとつては、これが始めてでございます。島へ行ってみずまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、わたくしはこの二百文を島でする仕事の本手にしようと思つてお

ります。「こう言つて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい」とは言つたが、聞く事ごと
にあまり意表に出たので、これもしばらく何も言うことが
できずに、考え込んで黙つていた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつていて、もう
女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きている
ので、家は七人暮らしである。平生人には吝嗇りんしやくと言われる
ほどの、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のため
に着るもののほか、寝巻しかこしらえぬくらいにしている。
しかし不幸な事には、妻をいい身代の商人の家から迎えた。
そこで女房は夫のもらう扶持米で暮らしを立ててゆこうと
する善意はあるが、ゆたかな家にかわいがられて育つた癖
があるので、夫が満足するほど手元を引き締めて暮らしを
ゆくことができな。ややもすれば月末になつて勘定が足
りなくなる。すると女房が内証で里から金を持って来て帳
尻を合わせる。それは夫が借財というものを毛虫のように
さらうからである。そういう事は所詮夫に知れずにはいな
い。庄兵衛は五節句だと言つては、里方から物をもらひ、
子供の七五三の祝いだと言つては、里方から子供に衣類を
もらうのでさえ、心苦しく思つているのだから、暮らしの
穴をうめてもらったのに気がついては、いい顔はしない。
格別平和を破るような事のない羽田の家に、おりおり波風
の起こるのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上

に引き比べてみた。喜助は仕事をして給料を取つても、右
から左へ人手に渡してなくしてしまふと言つた。いかにも
哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上
を顧みれば、彼と我れとの間に、はたしてどれほどの差が
あるか。自分も上からもらう扶持米を、右から左へ人手に
渡して暮らししているに過ぎぬではないか。彼と我れとの相
違は、いわば十露盤そろばんの桁が違つただけで、喜助のあり
がたがる二百文に相当する貯蓄だに、こつちはないのであ
る。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助が
それを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持ち
はこつちから察してやることができる。しかしいかに桁を
違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、
足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つ
けさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊の
りすることのできるだけで満足した。そこで牢に入つてか
らは、今まで得がたかつた食が、ほとんど天から授けられ
るように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知
らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我
れとの間に、大いなる懸隔けんかくのあることを知つた。自分の扶
持米で立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるに
しても、たいてい出納が合つている。手いっぱい生活で

ある。しかるにそこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過すごしている。しかし心の奥には、こうして暮らして、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようという疑懼ぎくが潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取り出して来て穴うめをしたことなどがわかると、この疑懼が意識しきの闕ひらの上に頭をもたげて来るのである。

いったいこの懸隔けんかくはどうして生じて来るだろう。ただ上だけを見て、それは喜助には身に係累けいらいがないのに、こつちにはあるからだと言つてしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもつと深いところにあるようだ、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思つてみた。人は身に病があると、この病がなかつたらと思う。その日その日の食がないと、食つてゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることができものやらわからない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光ごうこうがさすよ

うに思った。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん」と呼びかけた。今度は「さん」と言つたが、これは充分の意識をもつて称呼を改めたわけではない。その声わが口から出てわが耳に入っているや否や、庄兵衛はこの称呼の不穩当ふえんたうなのに気がついたが、今さらすでに出たことばを取り返すこともできなかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思つらしく、おそろおそろ庄兵衛の気色をうかがつた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらえて言つた。「いろいろの事を聞くようだが、お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについてにそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた様子で、「かしこまりました」と言つて、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしい事をいたしました。なんとも申し上げようがありません。あとで思つてみますと、どうしてあんな事ができたかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親ふたごが時疫はやりやまいでなくなりまして、弟と二人あとに残りました。初めはちようど軒下に生まれた犬の子にふびんを掛けるように町内の人たちがお恵みくださいますので、近所じゅうの走り使いなどをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。

次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるだけ二人が離れないようにいたして、いっしょにいて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟といっしょに、西陣の織場にはいりまして、空引※空引びということをしたことになりました。そのうち弟が病気で働けなくなつたのでございます。そのころわたくしどもは北山の掘立小屋同様の所に寝起きをいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つておりましたが、わたくしが暮れてから、食べ物などを買つて帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人ひとりかせがせてはすまないすまないと申しておりました。ある日いつものように何心なく帰つて見ますと、弟はふとんの上に突つ伏してしまして、周囲まわりは血だらけなのでございます。わたくしはびっくりいたして、手に持っていた竹の皮包みや何かを、そこへおっぼり出して、そばへ行つて『どうしたどうした』と申しました。すると弟はまっ青な顔の、両方の頬からあごへかけて血に染まつたのをあげて、わたくしを見ましたが、物を言うことができませぬ。息をいたすたびに、傷口でひゅうひゅうという音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも様子がわかりませんので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と言つて、そばへ寄ろうといたすと、弟は右の手を床に突いて、少しからだを起こしました。左の手はしっかりあごの下の所を押えています。その指の間から黒血の固まりがはみ出しています。弟は目でわたくしのそばへ寄るのを留

めるようにして口をききました。ようよう物が言えるようになったのでございます。『すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きにらくがさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだろうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力いっぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃こぼれはしなかつたようだ。これをうまく抜いてくれたらおれは死ねるだろうと思つている。物を言うのがせつなくつていけない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と言つたのでございます。弟が左の手をゆるめるとそこからまた息が漏ります。わたくしはなんと言おうにも、声が出ませんので、黙つて弟の喉の傷をのぞいて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、そのまま剃刀を、えぐるように深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり傷口から出ています。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじつとわたくしを見詰めています。わたくしはやつとの事で、『待つていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしましたが、また左の手で喉をしっかりと押えて、『医者があるになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と言つたのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持ちになつて、ただ弟の顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目

が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と言って、さも恨めしそうにわたくしを見ています。わたくしの頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでございましたが、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしそうなのがだんだん険しくなつて来て、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になってしまいます。それを見ていて、わたくしはとうとう、これは弟の言ったとおりにしてやらなくてはならないと思ひました。わたくしは『しかたがない、抜いてやるぞ』と申しました。すると弟の目の色からりと変わつて、晴れやかに、さもうれしそうになりました。わたくしはなんでもひと思いにしなくてはと思つてひざを撞つくようにしてからだを前へ乗り出しました。弟は突いていた右の手を放して、今まで喉を押えていた手のひじを床に突いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかりと握つて、ずっと引きました。この時わたくしの内から締めおいた表口の戸をあけて、近所のばあさんがはいつて来ました。留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように、わたくしの頼んでおいたばあさんなのでございます。もうだいぶ内のなかが暗くなつていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのかわかりませんでした。が、ばあさんはあつと言つたきり、表口をあげ放しにしておいて駆け出してしまいました。わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、まっすぐに抜こうというだけの用心はいた

しましたが、どうも抜いた時の手ごたえは、今まで切れていなかった所を切つたように思われました。刃が外のほうへ向いていましたから、外のほうが切れたのでございましょう。わたくしは剃刀を握つたまま、ばあさんのはいつて来てまた駆け出して行つたのを、ぼんやりして見ておりました。ばあさんが行つてしまつてから、気がついて弟を見ますと、弟はもう息が切れておりました。傷口からはたいそうな血が出ておりました。それから年寄衆がおいでになつて、役場へ連れてゆかれますまで、わたくしは剃刀をそばに置いて、目を半分あいたまま死んでいる弟の顔を見詰めていたのでございます。」

少しうつ向きかげんになつて庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう言つてしまつて視線をひざの上で落とした。

喜助の話はよく条理が立っている。ほとんど条理が立ち過ぎていふと言つてもいいくらいである。これは半年ほどの間、当時の事を幾たびも思い浮かべてみたのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるそのたびごとに、注意に注意を加えてさらつてみさせられたののためである。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた時から起こつて来て、聞いてしまつても、その疑いを解くことができなかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死な

れるだろうから、抜いてくれと言った。それを抜いてやって死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であったらしい。それが早く死にたいと言ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見てに忍びなかった。苦から救ってやろうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思うと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこやらにふに落ちぬものが残っているのです、なんだかお奉行様に聞いてみたくならなかつた。

次第にふけてゆくおぼる夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。

※入相の鐘 日暮れ時に寺でつく鐘

白河楽翁 松平定信

懸隔 程度が甚だしくかけ離れていること

疑懼 どうかなることかと心配して不安に感ずること

空引 手工紋織り用の織機で、錦や綾を織ること

オオトリテエ オオソリテエ・権威や大家

森鴎外は、この「高瀬舟」を書いた動機として、「高瀬舟縁起」で、次のように書いている。

京都の高瀬川は、五条から南は天正十五年に、二条から五条までは慶長十七年に、角倉了以が掘つたものだそうである。そこを通う舟は曳舟ひきふねである。元来たかせは舟の名で、その舟の通う川を高瀬川と言うのだから、同名の川は諸国にある。

(中略)

徳川時代には京都の罪人が遠島を言い渡されると、高瀬舟で大阪へ回されたそうである。それを護送してゆく京都町奉行付の同心が悲しい話ばかり聞かせられる。あるときこの舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつていながつた。その子細を尋ねると、これまで食を得ることに困つていたので、遠島を言い渡された時、銅銭二百文をもらったが、銭を使わずに持つてゐるのは始めだと答えた。また人殺しの科はどうして犯したかと問えば、兄弟は西陣に雇われて、空引ということをしてゐたが、給料が少なくて暮らしが立ちかねた、そのうち同胞が自殺をはかつたが、死に切れなかつた、そこで同胞が所詮助から

ぬから殺してくれと頼むので殺してやったと言った。

この話は『翁草』に出ている。池辺義象いけべよししかたさんの校訂した活字本で一ページ余に書いてある。私はこれを読んで、その中に二つの大きい問題が含まれていると思った。一つは財産というものの観念である。銭を待ったことのない人の銭を持った喜びは、銭の多少には関せない。人の欲には限りがないから、銭を持つてみると、いくらあればよいという限界は見いだされないのである。二百文を財産として喜んでのがおもしろい。今一つは死にかかっていて死なれずに苦しんでいる人を、死なせてやるという事である。人を死なせてやれば、すなわち殺すことになる。どんな場合にも人を殺してはならない。『翁草』にも、教えのない民だから、悪意がないのに人殺しになったというような批評のことがあったように記憶する。しかしこれはそう容易に杓子定木して決してしまわれる問題ではない。ここに病人があつて死に瀕して苦しんでいる。それを救う手段は全くない。そばからその苦しむのを見ている人はどう思うであろうか。たとい教えのある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦しみを長くさせておかずに、早く死なせてやりたいという情は必ず起こる。ここに麻酔薬を与えてよいか悪いかという疑いが生ずるのである。その薬は致死量でないにしても、薬を与えれば、多少死期を早くするかもしれない。それゆえやらずにおいて苦しませていなくてはならない。従来の道徳は苦しませておくと命

じている。しかし医学社会には、これを非とする論がある。すなわち死に瀕して苦しむものがあつたら、らくに死なせて、その苦を救つてやるがいいというのである。これをユウタナジイ（安楽死）という。らくに死なせるという意味である。高瀬舟の罪人は、ちようどそれと同じ場合にいたように思われる。私にはそれがひどくおもしろい。

こう思つて私は「高瀬舟」という話を書いた。

提供・「青空文庫」

つまり、鴉外は、医学者としての立場から、現在でも結論が出ていない、「安楽死」という問題を提起したつものようだ。

しかし、筆者的には、その安楽死を手伝つた？者が、遠島者として島送りになる罪刑よりも、殺人に次ぐ重刑としての流刑になつた当時の罪刑に関心が向かう。

それは、この書に取り上げた、定舜上人や重八どのの犯したという罪とその罪刑のギャップを感じるためである。

現在は、犯罪者の人権や刑罰を、その被害者や家族たちよりも、重視しているという考えもある。

つまり、そのくらい、いかに犯罪者ともいえ、人権を重く見ているという事である。

しかし、江戸時代というか、つい先年まで、人権を軽視

した政治が続いたことで、犯罪を犯した人の人権は軽く扱われてきたことは否めない。

現在、犯罪を犯した人は勿論、その疑いがある人に対しては、徹底的な捜査と裁判が行われる。それでも、そのしつかりとしたはずの法制が有るにも関わらず、今だ冤罪の疑いがある判決があることも事実だ。

それほど、人が人を裁くというのは難しい。

この森鷗外の小説は、そうした点には踏み込んでいないようである。基本的には医師であるため、安楽死をさせた者を罪に問うことの是非を論じているようである。

ただし、単にその罪の是非を論じるよりも、その罪を犯した？者と、その者を護送する役人との、心の通った交流が、この小説の意味とする所と、読む人は多いのではないだろうか。

流石、小説家森鷗外といたい。

森鷗外

森鷗外 1862年 - 1922年

日本の明治・大正期の小説家、評論家、翻訳家、陸軍軍医、医学博士・文学博士。本名は森^{もり}林^{りん}太郎^{たろう}。

石見国津和野（現・島根県津和野町）出身。東京大学医学部卒業。

大学卒業後、陸軍軍医になり、陸軍省派遣留学生としてドイツでも軍医として4年過ごした。帰国後、訳詩編「於母影」、小説「舞姫」、翻訳「即興詩人」を発表する一方、同人たちと文芸雑誌『しがらみ草紙』を創刊して文筆活動に入った。その後、日清戦争出征や小倉転勤などにより、一時期創作活動から遠ざかったものの、『スバル』創刊後に「キタ・セクスアリス」「雁」などを発表。乃木希典の殉死に影響されて「興津弥五右衛門の遺書」を発表後、「阿部一族」「高瀬舟」など歴史小説や史伝「澁江抽斎」等も執筆した。